

潰瘍性大腸炎の治療経験

梁鍼灸治療院
梁 茂寛

症例：男性 30歳

主訴：下痢及び腹痛

既往歴：10年前より下痢が頻回、徐々に水溶性下痢と出血が認められた。ときには腹痛も伴っていた。近医に受診し炎症性の大腸炎と診断されたが症状が悪化したため専門医を紹介され受診。検査の結果、潰瘍性大腸炎と診断され治療を開始した。

現病歴：潰瘍性大腸炎の治療後、症状の寛解と悪化が反復していたが半年前より血性下痢と腹痛が持続的に出現、症状の改善を求めて当治療院に来院した。

他に1～2か月前より嗅覚障害も出現。

治療経過

初診時の反応点

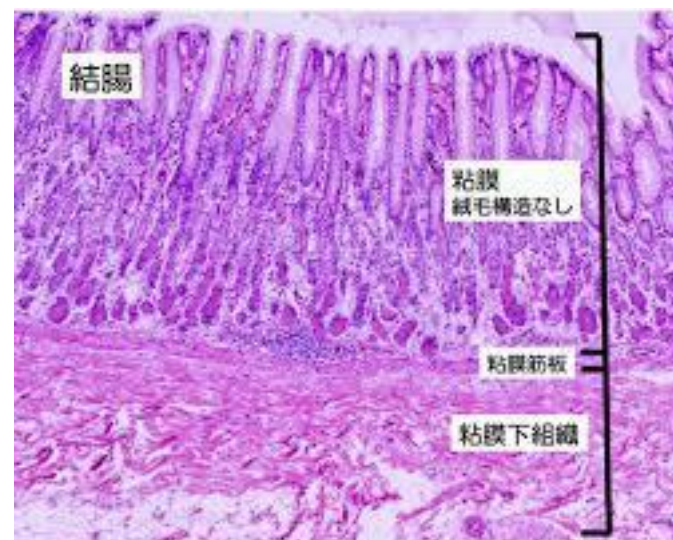
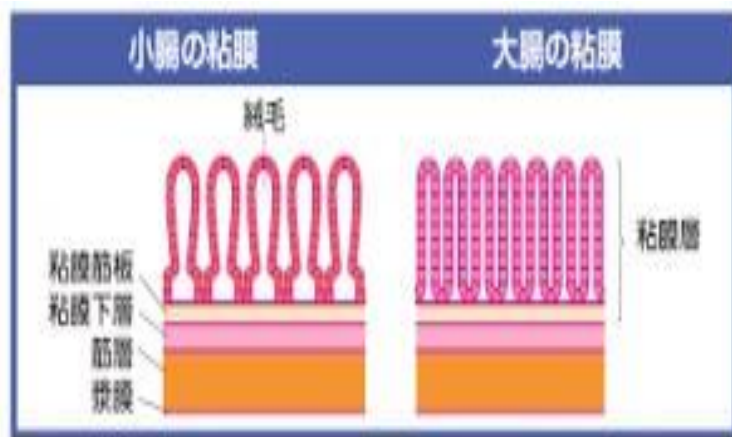
: 直腸、S状結腸、下行結腸、肝臓

: 内耳、鼻腔、副鼻腔、咽喉

- ・11月 上記の反応点に治療開始、特に下腹部領域には強刺激を加えた。せんねん灸も施灸。当面、週2回施術を行った。
- ・12月 下痢症状が軽減してきたが引き続き下腹部には強刺激を加えた。週1回の施術
- ・1月～ 症状が軽減していたが週1回の治療で継続中

潰瘍性大腸炎とは

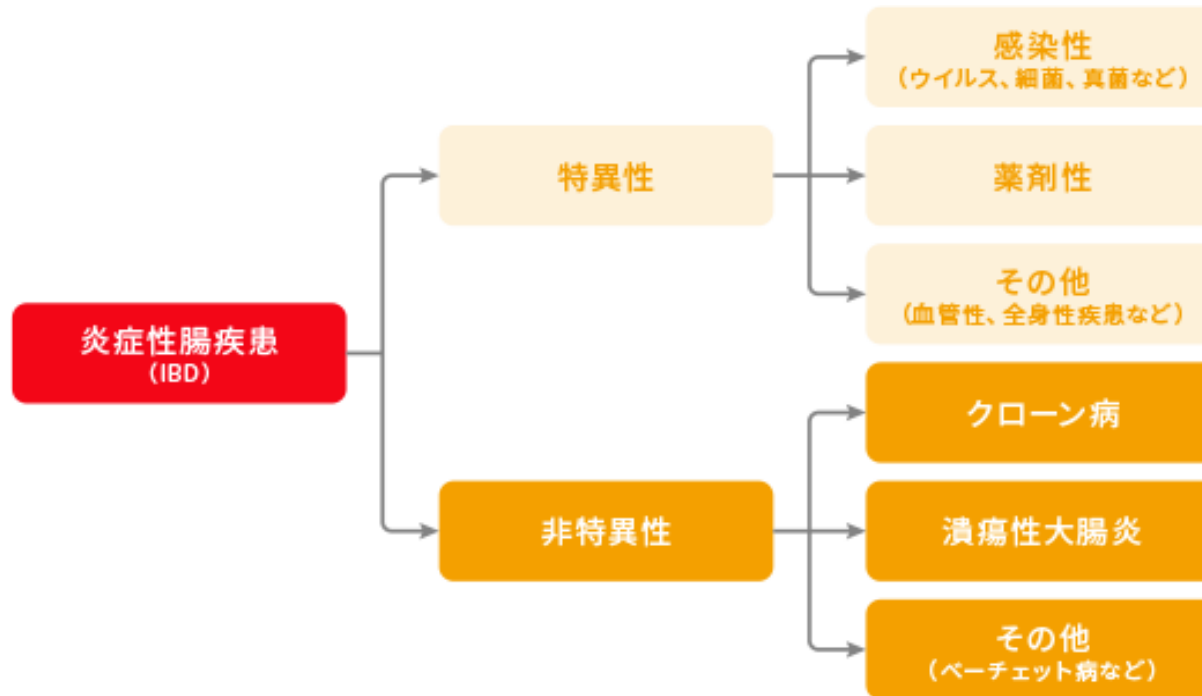
大腸粘膜にびらんや潰瘍ができる炎症性疾患



潰瘍性大腸炎の病巣は粘膜層～粘膜下層

潰瘍性大腸炎とは

大腸粘膜にびらんや潰瘍ができる炎症性疾患



* 参考: 日比紀文ほか編:IBDを日常診療で診る, p24, 羊土社, 2017より

原因：不明

症状：血便、粘血便、下痢あるいは血性下痢が主

重症化・・・水溶性下痢と出血

・・・他症状：腹痛、発熱、食欲不振、体重減少、
貧血

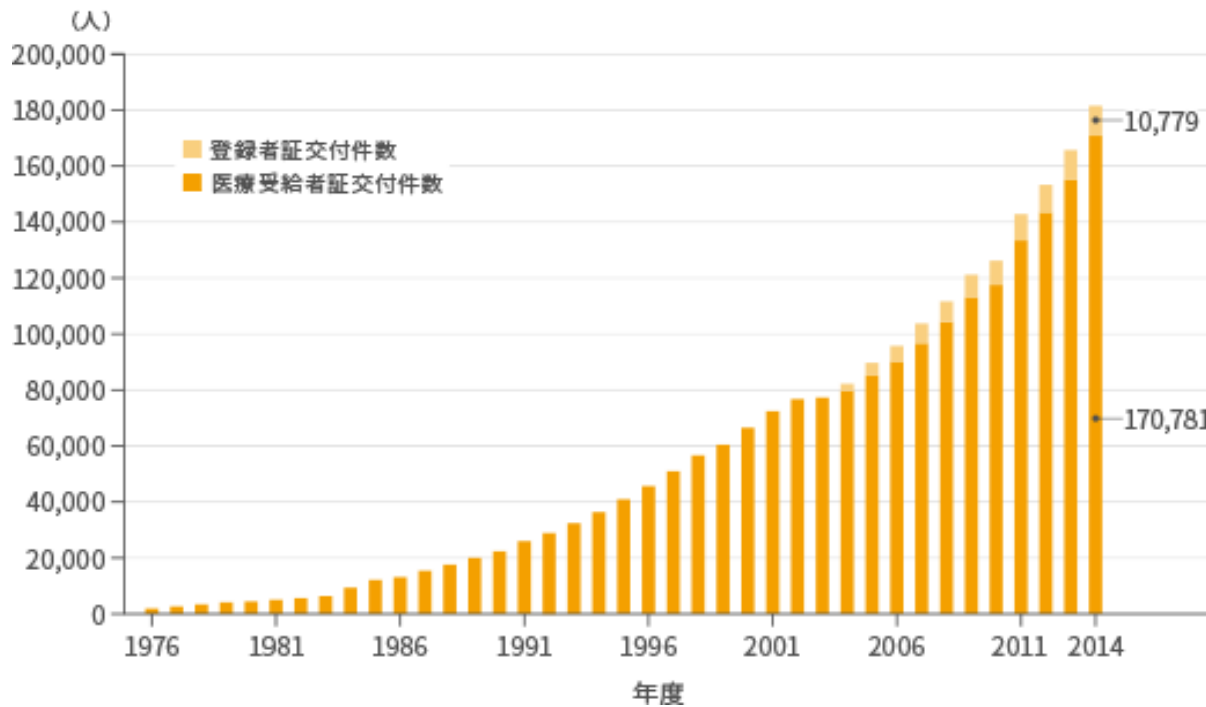
腸管外合併症・・・関節炎、虹彩炎、睇炎、
皮膚症状（結節性紅斑、壊死性膿皮症）など

治療：内科的

（治療薬）5-ASA製剤（抗炎症剤）、ステロイド剤
免疫抑制剤

外科的・・・手術

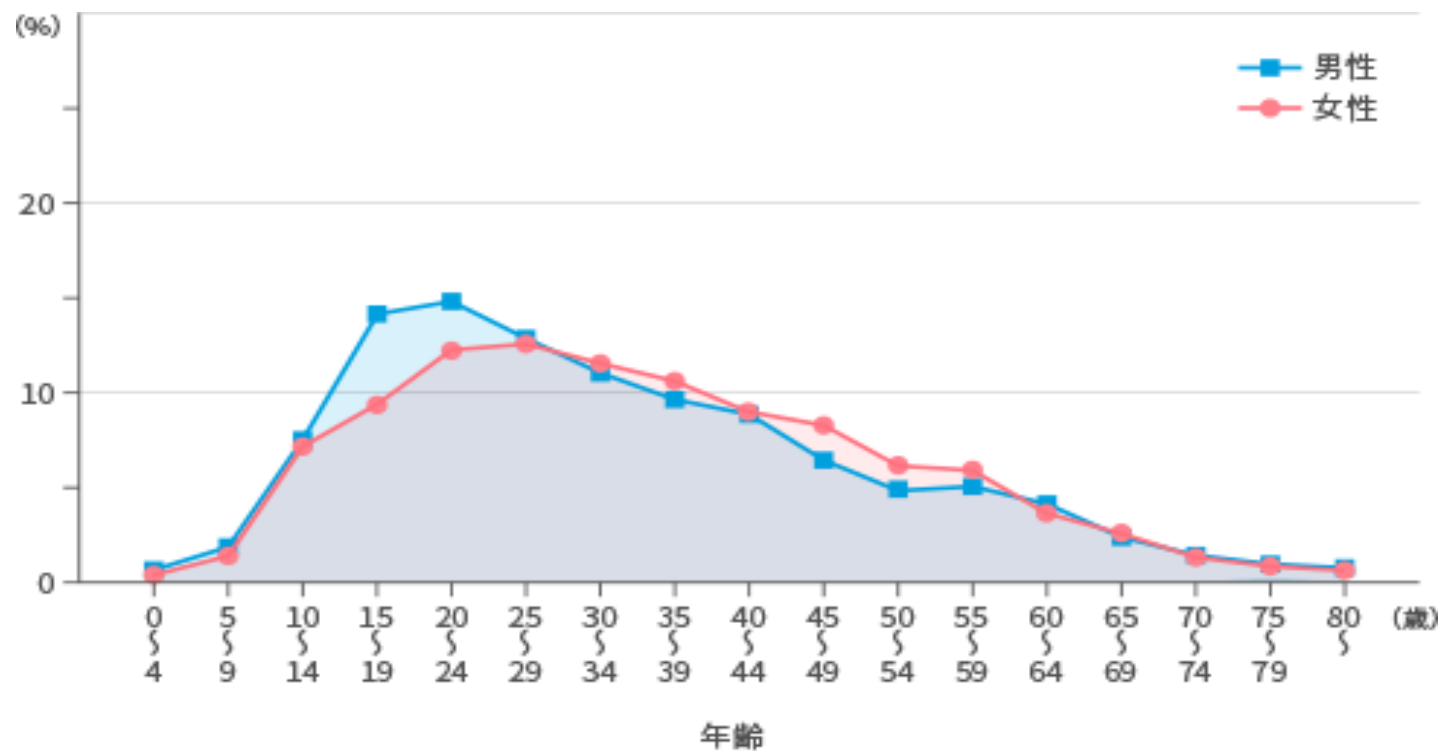
潰瘍性大腸炎医療受給者証・登録者証交付件数の推移



約17万人
(H26年)

参考：厚生労働省：衛生行政報告書例の概況

潰瘍性大腸炎の推定発症年齢

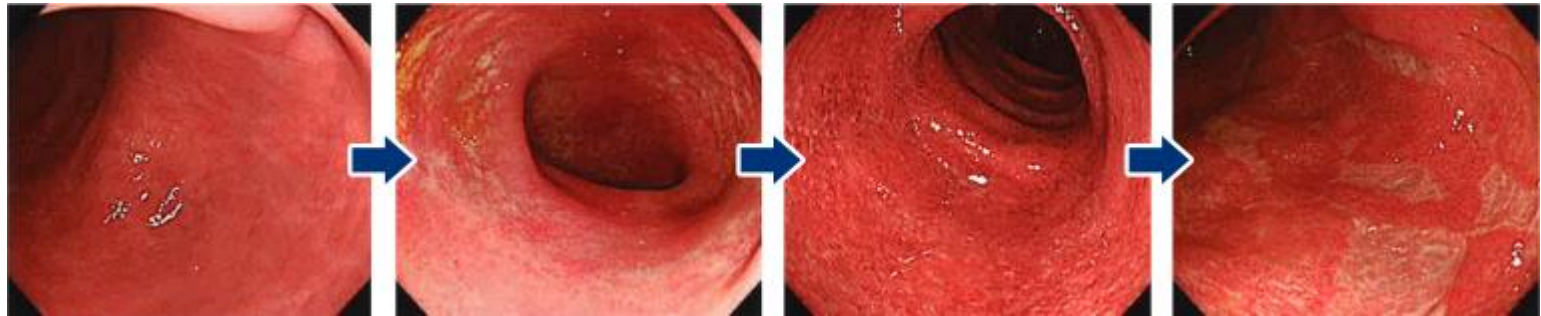


参考: 難病情報センター: 潰瘍性大腸炎

診断と病変

診断：内視鏡検査、X線造影検査など

病変：



正常

軽度

中等度

重度

わずかな血便
粘膜紅斑(少)

排便時出血
粘膜紅斑・浮腫

著名な血便
出血や潰瘍

参考：NPO法人日本炎症性腸疾患協会(CCFJ)編：潰瘍性大腸炎の診療ガイド 第3版

病変発生部位

- ・直腸炎型：炎症が直腸だけに局限しているもの
- ・左側大腸炎型：炎症が脾彎曲部＜脾湾曲部＞を超えていないもの
- ・全大腸炎型：炎症が大腸全体に広がっているもの

潰瘍性大腸炎の病変の広がりによる分類



参考：難治性炎症性腸管障害に関する調査研究班(鈴木斑)
：潰瘍性大腸炎の皆さんへ 知っておきたい治療に必要な基礎知識

考察及びまとめ

- ・炎症性疾患と考え、

- ①出現している反応点を消失させるのを目標とした。

- ②腹痛が存在した場合、自源抑制により鎮痛効果を期待した。

- ・自己免疫異常考え

- ③下腹部のみならず肝臓へのアプローチも行った。

- ・症例の性質上

- ④寛解と再燃を繰り返す疾患のため、常に症状の観察を行う。